



「幼児の生活発表」に

賞をうけて

栗田 成子

去る五月二十六、七日の両二日、長野県諏訪市で行われた日本保育学会第九回大会は、参加者およそ七千名、北は北海道、南は九州の果てから集まった会員で会場はあふれるばかりの盛会であったが、今始めて設定された倉橋賞は、選考委員会の審議の結果、今回発表の研究中よりここに掲げた「幼児の生活発表」を発表された栗田成子氏（神田寺幼稚園教諭）「小児期に於ける体質究明の一方策」を発表された竹村計美氏（長野県保育専門学校講師）の二人が最初の栄ある賞を獲得されたので、ここに研究の動機、概略、感想などを記してもらった。

一、研究の動機

私は昭和二七年に卒業し四月から神田寺幼稚園に就職しました。受持は三才児で森崎先生と一緒にしました。森崎先生が保育してくださる間、知らん顔をして見ているのが具合悪く、いつか観察し記録をとる仕事をはじめました。次第に生活発表の記録がたまっていきましたので、そのうちにこれをまとめてみたら、何か役立つのではないかと思うようになりました。然し当時の私は、どんな方法で整理をするか、何をねらって研究をしたらよいかという事も、さっぱりわかりませ

んでした。そのうちに一年はたつてしまいました。

昭和二八年になると東京私立幼稚園協会の第五回幼児教育研究発表協議会が計画され、私どもの幼稚園では発表の白羽が私にあたりました。それでいよいよ、この生活発表の記録をまとめてみようと思いたちました。この時のねらいは、生活発表の中にどの様なことばがどんな形で使われているか、又幼児がどの様な環境でどんな生活をし又なにに興味をもっているか、どんな生活が語られているかということでした。私はこの子供達をつづけて四才児五才児と受持ち、生活発表

の記録は引つづきとつていました。この子供達は昭和三〇年三月に卒業していきましたので、又新しい三才児をもつことになりました。

本年になって保育学会で発表するよう
に園長先生にすめられた時、あの生活
発表の記録を新しい観点から、まとめて
みようと思いたちました。はじめは生活
発表における言葉の豊かさや、文章のと
とのいは知能の発達と大きな関係がある
のではないかと考えました。幸い子供達
については、四才の時に田中ビネ——五
才の時にWISCの両知能検査の結果が
とつてありました。然しもつと考えてみ
ると生活発表を左右するものは、知能だ
けではないようにも考えられます。そこ
で結局何が最も大きく生活発表に作用し
ているかを確かめてみることにきめたので
す。

考えてみると大勢の人の前で自分の意
見をまとめて、はつきりということとは、
これからの民主社会に生きる人の大切な
能力であります。教育者も親も、子供達

の最も小さい時から、この力を正しくつ
けていくように配慮し、それを阻む要因
を取り除く様に努めなければならぬも
のです。今から考えると何気なしに始め
た生活発表の記録とりの仕事か、こうい
う大切な教育のねらいに、上手にはまっ
ていたわけでありました。

二、研究の概略

1 研究のねらい

三年間保育児について月曜日の朝、前
日の生活経験を自由な気持ちで発表させこ
れを記録して皆の前でまとまった言語発
表が出来ることにはどんな因子が最も大
きく働いているかを調べ、全員が発表で
きる様になるための指導法をさぐってみ
ようとした。

2 研究の手つづき

調査

- (1) 三才より五才までの三年間に渡る生
活発表の記録をとった。
- (2) 知能検査 向性検査 家庭の文化的
環境を調査した。

分析

(1) 記録した生活発表を日本語の基本文
型に従つて分析する。

(2) 生活発表と、知能、社会的向性、家
庭環境の三者との間のそれぞれの相
関を求める。

(3) 三年間に渡る言語発表の変化の著し
い園児についての分析をする。

(4) 言語発表のおくれた子供について主
な原因を追求する。

3 結果

(1) 相関

▽知能指動との間の相関については、
五才時の生活発表と五才時に行われた
WISC知能検査との間では〇・五四
ではば相関がみられたが三カ年の総合
した生活発表と田中ビネー、WISC
両検査の中間値の間の相関は〇・三七
で殆どみとめられない。

これは二五名中一〇〇以下の者が僅か
に三名であり最低の者でも九三である
という非常に上に偏りすぎた標本群で
ある事と、生活発表はそのまま言語の

発達度を示すものでない改つた場での発表であるというからこの様な結果になつたものと思われる。

▽社会的向性との間では〇・六九で予想通り相当高い相関がみとめられた。

▽家庭環境との間の相関は生活発表に当の影響をもつものと予想されるが相本調査においては全く相関は認められない。本園児の家庭が一般からみて相当高い位置で平均化しているという事によるのかもしれない。

結局知能指数や家庭環境に特に問題のない限り、生活発表をするかしないかが大きく左右するものは、社会的向性であるという事が出来る。

(2)年令により変化の著しい場合

三年間の生活発表を通してその間に上下の変化の激しい子供達について考察してみても、幼児の生活発表には偶然的要素が多いが向性の問題がキーポイントになつてゐることが伺われる。

(3)生活発表におかれた者の要因
生活発表におかれた者のみを考察して

みるとこの場合も向性の問題が大きくはたらいておりそれと知能の低さが、むすびつき、あるいは育児の際の過剰疵護が加えられる条件が、からんだりすると、ますます社会的な場での発表を行わない子供になる事が言える様である。

三、感想

私の研究をふり返ってみると、研究の手つづきに、いくつかの不備な点があつた事に気付きます。その一つは生活発表にあたつていつも皆の子供に平等に機会を与えその上充分に言わせる様にする事が励行しつづけられなかつた事であります。又生活発表について論理的な質の評価を加える事が出来たら、もっと適確な結論が出たのではないかと、更に家庭環境について本の数の多少等という程度のちがいでなく、もっと根拠のある層別を工夫すべきだつたと考えたり、生育歴等も詳しく調べておけば、もっと細かなキーマスターも出来たのではないかと等と、

まとめ出してから始めていろいろと考えさせられてしまいました。

然しこの様な事が私の今後の保育の上には丁度よい勉強になりました。これからも出来るだけ研究をつづけていき度いと思つております。

第九回日本保育学会では倉橋惣三先生の御功績をたたえる倉橋賞が設定され、その第一回の授賞を頂きました。私に授賞等という事は本当に思ひがけない事でしたので恐縮するばかりでございました。

動機にも述べた様に、私は日常の保育の中で幼児一人一人を把握し、よりよく成長させて行き度いという事を念じておりましただけで、今回の発表もその様な意味でまとめたものにすぎません。研究を目的としていいものでないので、資料も少く、形体もととのはないものでしたが、当日会場の方々の御静聴を頂いて本当にうれしく思いました。現在も引つづいて記録をとつておりますが、これから幼児教育を高めて行くためには、私達

保育者自身が日頃の実践を多少でもまともに研究して行く態度が大切だと思いま

す。

(東京・神田寺幼稚園)

「小児期に於ける体質究明の一方策」に

賞をうけて



竹村 計美

小児科の専門医として毎日臨床に従事して居りましたが、私は多くの病児及びそれに付き添って来る母親の態度をみるにつけて小児科の臨床医は小児の病理のみではなく、小児の生理及び心理を充分究明し、精神身体医学的にその体質を理解し、病理を知る事がより一層患児を疾病より速かに治癒せしめ、更に健康小児虚弱児童を疾病より護ると同時にたくましい発育をはからねばならない事を痛感致して居りました。

幸い昭和二十六年より新潟大学医学部

公衆衛生学教室の教授小坂隆雄博士の御指導を得、なお長野県学校医会長寺島博士の御援助により、小児に於ける動態的体質の研究に従事する機会を得ました。爾後小児の体質について特に幼児(保育園児)を中心として健康者及び病児を対象として年令差を五年間研究を続けて参った訳です。

第九回保育学会が諏訪市に開催にあたって校医会長寺島博士及び保育専門学院長根岸先生の奨めがあつて、その研究の一部を「小児期に於ける体質究明の一方

方策」として発表させていただいたのであります。

研究内容の概要

私達の生活現象は身体内部環境で絶えず平衡調和を外保たうと諸機能がいろいろと役割を演じ、また外部環境に対しては自己の生命の自由を守らうと体も心もいつも努力している。この努力する生活反応の表われを体質と考えられます。

生活現象の平衡状態を保つ機能の中で重要なものの一つに自律神経系があり、この中で交感神経と副交感神経がその役割を果している。内分泌(ホルモン)とくに脳下垂体副腎皮質系機能は生命現象体や心の働きに順応するのに非常に重要な役目を果していることが最近明らかにされて来た。即ち、このホルモンは生活反応の表われである体質を支配する重要な要因の一つであることが判る。

そこで私は脳下垂体副腎皮質系機能の一つのめじるしとされている血液中の白血球の一成分好酸球について調べ、好酸